

子どものとらえなおし

— その系譜と課題

酒 井 博 世

序 —子どものとらえなおしの必要性—

- (1) わが子を受するのはたやすいことではない
- (2) 大人不信の増大
- (3) 国連「子どもの権利条約」の採択
- (4) 本小論の課題

I. 60, 70年代における子ども把握

- (1) 「現代っ子」の登場— 1960年代の子ども把握—
- (2) 発達の危機の顕在化— 1970年代の子ども把握—

II. 子どもがつかめない—子どものとらえなおしへの胎動

- (1) 子どもがつかめないという嘆きの登場
- (2) 子どものとらえなおし

III. 子ども研究の新たな展開—現代子ども研究の課題—

- (1) 子どものとらえなおしをどう進めるか
- (2) 「新しい中世の到来」
- (3) 「発達」概念の否定
- (4) 発達研究の到達段階に学ぶ

序 —子どものとらえなおしの必要性—

- (1) わが子を受するのはたやすいことではない

『わが子 (enfants) を受するのはたやすいことではない』¹⁾という書物がある。この書物の書名は、私たちの子育て、あるいは教育という営みが今日非

常に困難な状況に置かれていることを、端的に表現してくれている。誰も
が「わが子を愛している」と思っている。しかし、今日わが子に限らず子
もや生徒を愛するという一見疑う余地のない純粹にみえる行為が、決して思
うほど容易なことではないことは、この書名が示す通りである。20世紀も
終わろうとしている今日に生きる私たちは、子育てという面からみるとなん
と大変な時代に生きていることか。『日本子育て物語——育児の社会史——』
の著者上笙一郎は、1960年代における子育てに関わる自身の体験と比較し
ながら、「20世紀末の今、日本社会における子育ては大変な上にも大変だと
言わなくてはならない」²⁾と述べている。

筆者には、15年ほど前(1970年代後半)に長男が小学校入学の時期を迎え
たころ、筆者の親としての感覚と、子どもの祖父母世代の感覚の間に微妙な
ズレのあるのを感じた思い出がある。祖父母は、孫の入学を「赤飯炊いての
祝い事」として素朴に喜んでくれていたのに対して、親としての筆者は、や
や大げさに言えば、「これから多くの困難が待ち受けているであろういばら
の道」に子どもを旅立たせるような、「構えた」心境にあって、「赤飯炊いて
の祝い事」という受けとめ方に違和感を感じたものである。子どもの成長・
発達の節目節目で、その事実を確認し、ともに喜び合いながら子育てに取り
組んできた旧来からの習俗が、そのままの形では素直に継承しにくい状況が
当時すでにあったようである。

しかしそうは言っても、親としてはあまりそのことを深く追究もせず、
「こんなものだ」と思って、親がこのくらいの苦勞をするのは当たり前と思
い、一生懸命(というよりむしろ適当にといった方が正確かもしれない)子
育てに取り組んできた。その背後には、子どもを思いやる気持ちがあればな
んとかなる、という思いがあったことは確かである。多くの親や教師もま
た、自分たちが心から子どものことを愛していて、それゆえにまた子どもの
ことが心配で、純粹に子どものためにという気持ちで、あれこれやっている
んだ、ということを感じて疑うことなく、「一生懸命」子育てに取り組んで

いるのであろう³⁾。

しかし、今や、子育てという営みは、親や大人の子どもに対する「愛情」といった感情や気分の問題では解決できない、そこで終わらない状況に私たちは置かれている。わが子に限らず子どもや生徒を「愛するということは、人びとがあらゆる社会的背景から切り離して考えることができるような本能的で普遍的な単なる自然の動きに対応することでは少しもない」⁴⁾のである。私たちは、改めて子どもという存在についての理解を深めなければならないし、子ども理解を通して、子どもの置かれている状況についてもっと目を向ける必要があるように思われる。このことは換言すれば、私たちがこれまで作り上げてきた子どもについてのとらえ方、「子ども観」の新たなとらえなおしが今早急に求められている、ということの意味している。

(2) 大人不信の増大

にもかかわらず、現実には親も教師も「子どもたちのため」を思う自らの心情に何の疑念も持たず、実にさまざまなことを、あれもこれも子どもに要求しようとしている。はたして、こんなにたくさんの子どものことを子どもが覚えきれぬのだろうか、という疑問が生じるようなことでも、「これを覚えるのが、子どもにとってためになるのだ」という論理で子どもたちに無理矢理押し付けられたり、子どもはまるで、道徳的にも人格的にも常に完べきな状態ではないかならなければならぬかのような調子で、微にいり、細にいった行動規制がおこなわれたりしている。子どもが完全無欠ではあり得ないことなど、まるで念頭に置かれていない。いったい子どもを何だと思っているのだろうか。

そういうさまざまな要求を出される子どもの方はたまったものではない。私たちは、もっと子どもたちの心からの叫びや願いに耳を傾ける必要があるが、その声が私たちの耳に聞こえてくる時には、すでに時遅し、という場合が多すぎる。

しかもすでに今日においては、子どもたちの心の中にはそうした大人たち

への不信の気持ちが広範に広がっているようにも思われる。次の文章は、1988年に東京都目黒区で起こった中学生による両親・祖母殺し事件の後開かれた教育集会の冒頭で報告されたある中学三年生の作文である。

「私はいま中学3年生、だれに会っても『たいへんね、がんばってね』としか言われない。『受験！ 勉強勉強！』と、自分のまわりをかけめぐるのは、このことばかり。学校でも家でも、いつも頭から勉強のことが離れたことはない。だからせめて家では、両親とは、きょうだいとは、別の話題で笑ったり、楽しんだりしたいと思う。成績のことでまた責められたら、もう自分の居場所がなくなってしまう。弱い人間だったら、生きていくのがつらくなって、自殺してしまうかもしれない。強い人間だったら、攻撃的になって、相手に向かっていき、今度のような結果になるかも知れない。私は、こんなところまで追いつめられていったAくんの気持ちがよくわかるような気がする。私たちの気持ちを両親でさえ真のところをわかっていないんだと思うことが、いっぱいある。いま私たちを認めてくれるのは、学力テストの順位や偏差値がすべてで、それ以外のことではほとんど評価されることがない。

家族のために台所でお菓子づくりをしたいなと思っても、『そんな時間があったら勉強しなさい』と言われてしまう……そういう友だち。

また、わけも聞かず、母の日のためのプレゼントを買い求めて帰ってきたところ、お母さんから、『どこをブラブラしていたの？ そんな時間があったら、勉強しなさい』とどなられて、何も言えず、家を飛び出してきた友だち。

勉強さえしていれば安心、勉強以外のことはさせないで、塾にまじめに通い、成績をあげていけば満足の大人たちには、私たち中学生の本当の気持ちなんて、とうていわかってもらえない……いつのまにか、そうあきらめてしまっていることがある。だから親子関係なんて、だんだんうすまっていて、『他人』というようなさびしい気分になってしまうことがある。

お小遣いを減らすほかに成績をあげる方法がなかった親の態度に、私はバカにされたような怒りを感じる。」

「つらい時、苦しい時、誰に相談するの？と母に聞かれ、私はしばらく考え込んでしまった。先生？友だち？と言われ、やっと担任の顔が浮かんできた。でも、すぐに消えた。学校の先生に対して、いつも成績の点数がまず気になってしまう。成績のよいときは先生との距離が縮まったようになるし、悪いときは何か言われそうでさけてしまったり……。いつもそこにあるのはテストの点数なのだ。落ち込んだときに相談に行くのは、よほどの勇気があるし、忙しそうなお先生をつかまえて個人的な話をするのは、まわりの目もあってほとんどできない。友だちもいるけれど、みんな、ほんとうのことはなかなか言わない。友だちのことまで一緒に考えてくれるほど、よゆうはないのだ。

だから家庭では、親であってほしいと思う。どんな自分でもさらけ出せる親であってほしいと思う。私たち中学生は、やっぱり勉強から逃げられないと思っている。がんばろうと思っている。そこを信頼してほしい。もっと広い心で見つめてほしいと思っている。」⁵⁾

ここに端的に示されているように、現実には大人の「子どもを思う気持ち」が、結果的に子どもたちを追いつめ、大人との距離を感じさせ、子どもと大人の敵対的関係すら作り出している、と言ってもよいであろう。

そうした子どもと大人との対立状況が作り出されている中で、大人の側の状況はどうかと言うと、そこには子どもをつかみきれず、子どもとの関係性を作り出せずにうろろしている親の、教師の姿がある。大人がこれまで描いてきた子ども像を前提にした、これまでどおりの子育てのあり方では、もはや対応しきれなくなっている現実がある以上、大人の側から、子どもとの距離を縮める努力を早急に開始しなければならない。

(3) 国連「子どもの権利条約」の採択

今一つ、今日私たちに子どものとらえなおしを求める外在的要因がある。1989年11月20日に国連で採択された「子どもの権利条約」である。

周知の通り、国連「子どもの権利条約」は、子どもも大人と同様に市民的諸権利の行使主体として尊重されるべき存在であることを各条文を通して示すことによって（第12条「意見表明権」、第13条「表現の自由」、第14条「思想・良心および宗教の自由」、第15条「結社の自由、集会の自由」等々）、「身体的および精神的に未成熟であるため」「特別に保護」すべき存在として子どもをとらえていた従来の子どもの観を発展させ、何が子どもの幸せになり、利益になるかは、大人が子どもに代わって一方的に決めるべきものではなく、子ども自身の考えを尊重しなければならないという観点を前面に押し出した。このことによって、大人は、子どもを大人の従属物としてではなく、一個の独立した人間として、大人と同様、人間としての精神生活を営む独立の人格として尊重すべきことが広く確認されたわけである⁶⁾。

また、国連における子どもの権利条約の採択を受けて開催された「子どものための世界サミット」（1990.9.30 於ニューヨーク）の「子どもの生存、保護及び発達に関する世界宣言」では、一方で「世界の子どもは、無垢で脆弱で、他者に依存している。」と書き、同時に他方で「子どもは、また、好奇心が強く、活動的で、希望に満ちている。子どもは喜びに満ちた平和な時間を過ごしながら、遊び、成長することができなければならない。子どもの未来は、調和と協力のうちに形成されなければならない。子どもは視野を広げ、新たな経験をしつつ成長しなければならない。しかし、多くの子どもにとって現実の生活は全く違ったものである。」と述べている⁷⁾。

ここには、「未熟であるがゆえに大人の保護を必要としている」という従来の消極的イメージだけでなく、活発で、能動的な子どもの姿が描かれ、子どもたちの成長が、そうした能動的な活動が保障されて始めて実現可能であ

ることが確認されている。子どもたちが人間的に成長していくためには、まさに「喜びに満ちた平和な時間を過ごしながら、遊び、学ぶ」ことが必要なのであって、その条件を創り出す、そのためにこそ子どもを「特別に保護する」必要がある、というわけである。子どもが余分な心配をせず、子どもらしく生き生きと、活発に生活できるように「保護しよう」というわけである。「保護」という名目で子どもを大人の言いなりにさせようとするのではなく、子どもの尊厳を確保し自立を促すことを目指して、子ども自身の能動的な、人間的な生活を保障しようという精神がこの条約には貫かれている。

このような条約が国連で採択され、日本もそれに賛成しその批准が時間の問題となっている状況の下では、これまで子どもというものをただ「未熟なもの」「保護すべきもの」としてのみとらえ、ともすれば「子どもだから」「子どものくせに」といった理由で、子どもの声に耳を傾けようとせず、子どもの人間的発達を阻害しがちであった従来の大人の態度、子ども把握、子ども観に対する厳しい反省が求められることになる。とりわけそうした「遅れた」子ども観が支配的な日本においては、大人たちの子ども観の総点検は緊急な課題となっている。

(4) 本小論の課題

本小論は、以上のような問題意識を前提に、戦後の日本において特に教育学の周辺において、子どものとらえなおしがどのように試みられてきたか、さらに今日の子どもの研究における子どものとらえなおしがどのような課題を内に含んでいるのかを考察しようとするものである。

〔注〕

- 1) ジョルジュ・スニデルス『わが子を愛するのはたやすいことではない』湯浅慎一・細川たかみ訳、法政大学出版局、1985年；George Snyders: *Il n'est pas facile d'aimer ses enfants*, Paris 1980.
- 2) 上笙一郎『日本子育て物語——育児の社会史——』筑摩書房、1991年、pp.1-3.
- 3) 現代社会においてはとりわけ教師には、そうした「純粹に子どもを思う気持ち」

が強く要求されている。例えば、臨教審第2次答申(1986.4)では「人間愛や児童・生徒に対する教育的愛情」が教師の「教養」の基盤に置かれるべきことが強調されていたし、1985年に教師の体罰による生徒の死亡事件を起こした岐阜県において、事件後県教育委員会内に組織された「生徒指導の在り方に関する緊急検討会議」の提言(1985.9)では、生徒指導に当たる教師に対して、「師弟一体の苦行を呼び、しばしば涙を伴いつつ、児童・生徒に感動と共感を与える」「真剣さ」「情熱に満ちた教師の姿勢」を持って呼びかけている。

- 4) スニデルス, 前掲書, p. 79.
- 5) 菊池良輔『子どもがなぜ親を殺すのか』民衆社, 1989年, pp. 9-13.
- 6) 国連「子どもの権利条約」の概要とその意義については、喜多明人『新時代の子どもの権利——子どもの権利条約と日本の教育——』エイデル研究所, 1990年, 増山均『「子どもの権利条約」と日本の子ども・子育て』部落問題研究所, 1991年, 等参照。
- 7) 増山, 前掲書, p. 227.

I. 60, 70年代における子ども把握

(1) 「現代っ子」の登場——1960年代の子ども把握——

戦後日本における子どものとらえなおしの試みとして最初に注目をあびた一人として、阿部進を取り上げることができるであろう。阿部は『現代子ども気質』『現代っ子採点法』『新版 現代子ども気質』などで、「現代っ子」という概念を用いて、戦前あるいは戦後まもなくの子ども像とは異なった新しいイメージの子ども像を描こうとした。彼によれば「現代っ子」とは、「まったく戦争とは関係なしに生まれ、テレビ、映画、漫画などのマスコミ文化全盛のときに育ちつつある、また“金”という力の偉大さを身に直接感じ、一体どんなおとなになって、どう生きたらよいかわからないときに」¹⁾したたかに現代社会を生き抜いていかなければならない子どものことであった。「現代っ子」という概念は、現在ではあまりにも日常用語化してしまっていて、一般的に古い世代とは違って時代の変化を敏感に受けとめる新しい感覚

や発想を持ちつつ他方においてさまざまなゆがみや弱点をもあわせもつ「今日の子ども」といった意味あいにおいて使われているが、阿部の意図は、「資本主義社会のなかで苛酷な生存競争に勝ち抜きつつ新しい社会の建設要員でもあるという二重の仕事を両立し得る人間」²⁾を描こうとしたものであった。それゆえ阿部においては「現代っ子」という概念は、かならずしも時代の変化に敏感に対応しながら、時々みせる子どもたちのさまざまな行動様式を「ガメつい、ドライ、凶々しい、礼儀知らず」といった具合に類型的にとらえようとするためのものではなかった。

しかしながら、阿部の意図とは別に、「現代っ子」という概念は、それが大人からみて新鮮な驚きと大いなる戸惑いと時にはもの足らなさや不満の対象でもある「現代の子ども」を表現するのにぴったりであったこともあって、流行語にまでなった。そしてその後の60年代から70年代初頭にかけての子ども研究は、「マスコミの中の子ども」「大衆消費の中の子ども」「現代社会と子どもの価値観」といったように、社会状況の変化を直接に受けつつ、その流れの中で示す子どもたちの新しい行動様式、「価値観」の特徴づけに焦点を当てながら、いかに新しい「子ども像」を描き出すかに努力が向けられた。そしてその多くは、部分的には「近ごろの子どもは」といったマイナスイメージを伴いながらも、全体としては新しい時代をエネルギーに生きていくバイタリティを持った「子ども像」をとらえていた。

例えば、加藤隆勝は、『現代っ子——その生活と価値意識——』において、「現代っ子」という概念を『現代の子ども』『今日の子ども』というほどの意味に用いながら、「マスコミなどで手軽につくられ流布されている現代っ子像」のゆがみをただそうとして³⁾、現代っ子の望む将来の生活、現代っ子の求める人物像、現代っ子の人物知名度、現代っ子の遊び、現代っ子とテレビなど、さまざまなアンケート調査の結果を検討して、現代っ子の特徴を総合的に描き出そうと試みている。その「まとめ」において加藤は、「現代っ子は、……激変するまわりの条件に影響されながらも、子ども本来の生活

の充実を求めて懸命に生きている」こと、現代っ子の実態は、一般に流布されている否定的、マイナスのイメージ（ガメツイ、ドライ、無責任、礼儀知らずなどなど）とは異なっていること、むしろ現代っ子の特徴や問題性は、現代の大人の問題性の反映に他ならないこと、などを指摘した⁴⁾。

しかしながら阿部らのとらえようとした「現代っ子」は、社会変化への対応という面においては確かに大人とはちがう新しさ、鋭さを表面的には示しつつも、他面においては社会の変化はより深く家庭や文化、学校、生活環境にまで及んでおり、次第にその影響が子どものひずみとして表れてくるようになる。子ども研究の視点にも当然、子どもをとりまくさまざまな生活環境の変化との関連で子どもをとらえようとする観点が導入されることになる。

こうした観点からの調査・研究の一つとして全国教育研究所連盟の取り組みがあげられる。同連盟はとりわけ家族の形態や家庭生活の構造の変化に注目し、それに伴う家庭の教育機能の変化と子どもの実態とを重ね合わせてとらえようとして、1967年以降精力的な調査研究活動を展開した。その成果は『日本の家庭と子ども——今日における家庭の教育機能を探る——』⁵⁾に集約されている。

(2) 発達の危機の顕在化——1970年代の子ども把握——

1970年代に入ると、いわゆる高度経済成長の矛盾（臨教審の言うところの「負の副作用」）が顕在化しはじめ、子どもの発達の「危機」的状況がさまざまに問題となり始めた。この点に比較的早くから注目して共同研究に取り組んでいたのは指定都市教育研究所連盟であった。同連盟は、とりわけ都市の子どもの生活実態をさまざまな角度から調査分析する共同研究に取り組んでいたが、その成果は『子どもの生活と教育』『都市の教育問題』『現代の子どもの意識と行動』など⁶⁾に集約されている。とりわけ『都市の教育問題』は、騒音問題、大気汚染、体力低下、性意識といったいわば社会のひずみの子どもへの直接的影響に焦点を当てている。

こうしたなかで70年代においては、さまざまな角度から子どもの発達の「危機」的状况を明らかにしようとする試みがなされた。以下、その幾つかをかいつまんでみておこう。

1. 「落ちこぼれ」現象

全国教育研究所連盟が1971年2月に発表した「義務教育改善に関する意見調査報告書」は、「授業についていけない子ども」がクラスの半数以上いると考える教師が多数を占める実態を明らかにして、多くの人々に強い衝撃を与え、マスコミで「落ちこぼれ」という用語が盛んに使用されるようになるきっかけを作った。ある研究会では、子どもの学力不足を心配して教師に相談に行った母親が、「できないのはお宅のお子さんだけではないのだから、心配しなくても大丈夫ですよ」といった変な激励？を受けて帰ってきた、といった報告がなされたりもした。この事態を受けて、その後1977年の学習指導要領の改訂において文部省は「ゆとり」の教育を強調せざるを得ないほどであったが、事態は改善されず、同連盟が1986年におこなった同様の調査においては、事態はより深刻になっている⁷⁾。

この問題を契機に70年代には、学校教育を通して子どもにどのような力を形成していくのかをめぐるいわゆる「学力」論争が活発に展開された。

2. 人格発達をめぐる矛盾の顕在化——「非行」の増大、一般化——

1970年代半ば以降、子どもの人格発達の深刻な事態を象徴するような事件が相次いだ。77年の家庭内暴力に走る高校生を父親が殺したいわゆる「開成高校生殺人事件」、79年の「エリート」高校生による「祖母殺人・自殺」事件、80年の予備校生が両親を金属バットで撲殺した「金属バット殺人事件」等である。これら一連の事件が、両親健在で経済的にはどちらかと言えば裕福な家庭の「普通の」子ども、むしろ日常的には「いい子」に属すると思われていた子どもによって引き起こされただけに、それによって与え

られた衝撃は大きなものがあった。

これらの事件は、その衝撃度の大きさにおいては確かに深刻な問題を投げかけたが、それらの事件を引き起こした真の理由・原因については非常に複雑な要因がからみあっているだけに、特定の要素を教訓的に抽出することがむずかしく、ともすれば「特殊な」事例として受けとめられがちであった。しかし、それらの事件が決して「特殊な」事例でなかったこと⁸⁾は、1988年に起こった東京目黒区の中学二年生による両親と祖母の刺殺事件に典型的に示されているように、類似の事件がその後も繰り返されていることをみれば明らかであろう。

そのほかにも、子どもが子どもを殺す事件なども相次いで報じられた⁹⁾。

こうした衝撃的事例を含めて1973年のオイルショックを契機とした不況とともに急激に増大しはじめた「少年非行」(警察庁統計による主要刑法犯少年)は、1978年に対人口比(少年1000人当たりに対する比率)で戦後最高を記録した。この増加傾向は1985年前後まで続き、以後減少することなく高い水準で推移し、戦後第三のピークの到来ということが盛んに語られるようになり、その深刻な実態を問題にする声が高まってきた¹⁰⁾。この時期に特徴的な傾向として指摘されたのは、低年齢化と「一般化」、女子「非行」の増大であり、そこに潜む問題として、現代の「非行」が単に青年期にしばしば見受けられる「一過性」のものとして見過ごすことのできない重大な質的变化を含んでいるということであった。能重真作はその点を次のように指摘した。「現代の非行問題は、単に子どもの発達過程におけるつまずきとしての少年期ないし青年前期特有の行動形態というとらえ方にとどまらず、一つは社会の問題状況を色濃く反映した一種の社会病理現象としての非行と、いま一つは子どもの発達のゆがみないしは停滞の現れとしての非行というとらえ方が重要になってくる。」「非行を個々の少年の問題として見るなら、それぞれに固有の物理的・心理的要因があるが、全体の動向として見るなら、非行はまさに社会病理現象だと言わなければならない。そして現代の非行は子

もの発達環境としての社会のひずみによって子どもの発達そのものがゆがめられ、おしとどめられていることから起こる非行という特徴を持っているのである。」¹¹⁾

3. からだのおかしさ

1966年に発表された文部省白書「青少年の健康と体力」はその「まえがき」において、青少年の体力に関して「体格は一段と改善されてきたといえる。しかしながら、これに伴う体力の伸びは、必ずしも、十分であるとは言えない。」という指摘をおこなった。この指摘には裏付けになる事実はなんら示されていないが、文部省はその後学習指導要領においても「学校教育のなかで体育を重視する、なかでも体力向上を重点目標にする」と述べるなど「体力づくり」を強調し、その運動は全国的に展開されていった。さらに1972年に出された文部省保健体育審議会答申「児童生徒等の健康の保持増進に関する施策について」においても、「最近、児童生徒の体格の向上に必ずしも体力の伸びが伴わない傾向がみられ」という指摘がなされている。

しかしながら、他方においては文部省が1964年以降毎年おこなっているスポーツテストの結果では、敏捷性、瞬発力、筋力、持久力、柔軟性等をみる体力診断テストにおいても、走、跳、投、懸垂、泳ぐ等の基本的運動能力をみる運動能力テストにおいても、70年代に入って「史上最高のレベルに達しているのではないか」¹²⁾という指摘すらなされている状態があった。にもかかわらず「今の子どもの体力はおちているのではないか、という実感は、国民のあいだに広がっている」という指摘はされ続けてきた¹³⁾。

問題はそのことの意味である。正木健雄は文部省のデータをさまざまな角度から分析して「背筋力」の低下という問題に着目し、その問題の重要性を次のように指摘した。「体力要素の中でも他の要素と異なって、背骨を支えて直立姿勢をとらせる背筋力のところに、このような明瞭な低下が認められるということは見過ごすことのできないことであると考えている。それは直

立姿勢をとって動き回ることをおっくうがらせたり、長続きさせないことになり、ひいては労働意欲や運動意欲を起こさせないことにつながるかも知れないと考えるからである」¹⁴⁾。正木は、背筋力は、直立姿勢を維持して活動する人間にとっては基本的に重要な筋力であり、この筋力の低下は、一方で「ちゃんとした姿勢を保てない」といった状態を引き起こすとともに、それにとどまらず、「直立姿勢を維持することが長続きしないと、これらの筋力から大脳に送られるインパルスの量が減少することになり、したがって大脳の活動水準が低下する原因」¹⁵⁾となり、ひいてはそのことが生活のさまざまな場面における活動意欲の低下につながる、と予想したわけである。

○正木のこの予想は、彼がその後NHKと共同で全国1000校の養護教諭を対象にしておこなった「子どものからだ」アンケートの結果と見事に符合していた。それによれば、現代における子どものからだのおかしさワースト5は、小学校では1.朝からあくび、2.背中ぐにゃ、3.アレルギー、4.腹でっぱり、5.朝礼でバタン、中学校では1.アレルギー、2.朝からあくび、2.朝礼でバタン、2.貧血、5.腰痛、高校では1.貧血、2.腰痛、2.高血圧、4.心臓病、5.朝礼でバタン、となっていた。この結果を総括して正木は「小学校や中学校で多く訴えられている“朝からあくび”と“アレルギー”を、大脳の興奮水準の低下と抑制水準の低下によるものと考えるなら、大脳の活動水準の低下としてまとめられる現象群である。また“背中ぐにゃ”“腹でっぱり”“朝礼でバタン”は、背筋、腹筋、下肢筋の弱化によるものであると考えることができ、軀幹の筋肉の弱化としてまとめられる現象群である。中学では、これら二つの現象群に、“貧血”“腰痛”という症候群が加わり、さらに高校では軀幹筋肉の弱化よりも多いこの症候群に加えて、“高血圧”“心臓病”という症候群までが上位に進出している。」「今の子どもたちの体力が低下しているのではないかという実感の実体は、なんと大脳活動水準の低下と軀幹筋肉の弱化にあったのである。」¹⁶⁾

文部省をはじめ多くの関係者が子どもの「体力のなさ」を過保護による

「根性のなさ」に求めようとしていたときに、このような科学的究明がなされてきた。

こうした子どもの発達の「危機」（否定的状況）の進行の下で、70年代から80年代の前半にかけては、改めて「子どもがどんな風に育っているか、どんな風に育っていないか」といった問題意識に基づく子どものとらえなおしが、さまざまに試みられたのであった。

〔注〕

- 1) 阿部進『現代っ子採点法』三一書房、1962年、p.5。
- 2) 同『新版 現代子ども気質』三一書房、1962年、p.240。
- 3) 加藤隆勝『現代っ子——その生活と価値意識——』大日本図書、1974年、pp.10-13。
- 4) 同上、pp.149-151。
- 5) 平塚益徳編『日本の家庭と子ども——今日における家庭の教育機能を探る——』金子書房、1973年。
- 6) 指定都市教育研究所連盟『子どもの生活と教育』東洋館出版社、1969年、同『都市の教育問題』東洋館出版社、1974年、同『現代の子どもの意識と行動』東洋館出版社、1979年、等。
- 7) 拙著『発達と教育の基礎理論』教育史料出版会、1988年、pp.144, 156, 柿沼肇『現代日本の教育状況』教育史料出版会、1989年、pp.86-87、等参照。
- 8) 本多勝一編『子どもたちの復讐 上・下』朝日新聞社、1979年、は、これらの事件の背後に、子どもたちが「加害者」に転ずる以前に「犠牲者」として存在している普遍的状況、日常生活の積み重ねを通して子どもたちに与え続けられている重圧＝親や教師、周囲の大人の「過度」の期待が存在していることを指摘することによって、問題の「一般性」を明らかにしようとしている。
- 9) 「今の世相を反映するのか、青少年の異常・不可解な行動が話題をにぎわしている。A市での事件は、6年生の男子が先生に告げ口をした1年生を恨んで下校途中待ち伏せして暴力を加えたうえに、ブロック塀から落として殺してしまっている。B市でも、小学6年生の男子が小学2年生の女の子にいたざらしようとして騒がれて、ベルトで殺してしまっている。この他に、一緒に砂場で遊んでいた友だちのたれかに、2歳の男の子が口いっぱい砂を飲まされて死んだ事件など、あげていくと昭和53年度だけでもその数は多い。」指定都市教育研究所連盟『現代の子どもの意識と行動』p.1。

- 10) このことを反映して70年代には、「非行」に関連する書物が相次いで出版され、いずれも高い関心を持って受けとめられた。例えば、竹内常一編『非行をとらえ直す』民衆社、1972年、全国司法福祉研究会編『非行をのりこえる』民衆社、1972年、能重真作編『非行』民衆社、1976年、同編『続非行』民衆社、1978年、能重真作・矢沢幸一郎編『非行——教師・親に問われているもの』民衆社、1976年、千田夏光『性的非行——女子中・高生の非行を追って——』汐文社、1978年、同『暴力非行』汐文社、1979年、若林繁太『教育は死なず』労働旬報社、1978年、林友三郎『改訂版 大人は敵だった』国土社、1979年、齊藤茂男『父よ、母よ』太郎次郎社、1979年、本多勝一編、前掲書、等々がある。
- 11) 能重真作「子どもの非行とは何か」ジュリスト増刊総合特集 No.16「日本の子ども」所収、有斐閣、1979年、pp.214-215。
- 12) 正木健雄『子どもの体力』大月書店、1979年、pp.19, 25。同「身体的能力の発達と教育の問題をめぐって」『講座・日本の教育、第3巻、能力と発達』所収、新日本出版社、1976年、pp.310-316、参照。
- 13) 正木『子どもの体力』p.11。
- 14) 正木「身体的能力の発達と教育の問題をめぐって」p.319。
- 15) 正木健雄「子どもの心とからだ」ジュリスト増刊総合特集 No.16「日本の子ども」所収、有斐閣、1979年、p.76。
- 16) 正木『子どもの体力』pp.64-75。

II. 子どもがつかめない

—子どものとらえなおしへの胎動—

(1) 子どもがつかめないという嘆きの登場

70年代に進行した子どもの発達の「危機的状況」は、それを単に事実として指摘するだけの客観主義にとどまることを許さない深刻な状況があった。それゆえこの時期の子どものとらえなおしは、同時に「教育らしい教育をどうしたらよいのか」という実践的課題意識と深く結びついていた¹⁾。

そして多くの教師たちは、圧倒的に否定的側面を示しつつもなお肯定的側面をもあわせもつ子どもを総体としてとらえるために、子どもの内面における矛盾・葛藤にせまりながらなんとか子どもとの接点を見いだそうと懸命に

試みた。しかしながら、そうした努力を重ねれば重ねるほど、肝心の子どもがつかめないという声が出されるようになった。

70年代には、子どもの発達の危機を表現する言葉として三無主義（無気力、無責任、無関心、無感動……）、五無主義といった言葉が盛んに使われた。そこには、「自らの諸活動をそれなりの仕方意識の対象にし、自覚的に自分の意識の中でとらえなおし、自分の生き方と関わってそれらに意味づけを与えていくこと、つまり自分自身の行う諸活動を自分自身の意識の中で統一し、一貫させること」²⁾ができないでいる子どもの問題状況、すなわち子どもの目的意識性の衰弱、生活への意欲と自主性の衰退、欠如が端的に示されていた。しかしこのことは、この時代の子どもたちの人間的本性そのものがそのような状態になってしまっていたということを意味しているわけではない。「地肌の教育」「生活に根ざし、生活を変革する教育」を標榜して「一人ひとりの子どもの魂のひだにふれることを基調とした人間教育」をおしすすめてきた恵那の教師たちは、このことを次のように分析していた。「子どもたちは、心の奥で、さまざまな問題に重くたえている。けれども、子どもの心のなかにうずまいている本当の問題はいまの子どもの手には負えない大きなものになっている。社会矛盾そのものをもろにかぶっているものばかりです。それがいまの生活環境のたてまえのなかで、それを口にして、それを公開したら、非難を受けるだけの、救われようのない性質の問題として子どもたちはとらえている。したがって、固く心を閉ざして生きているという状況になっているのではないだろうか。」³⁾

だが固く閉ざされた子どもの心の扉を開けることは容易なことではなかった。このような状況を前にして教師たちは、「子どもがつかめない」という思いを深めていったのである⁴⁾。

こうしたある種の戸惑いに似た気分は、当初はなんとかして子どもに対する働きかけのきっかけをつかもうとする立場からのものであったが、80年代後半になるにしたがって、次第に従来の常識では理解不能な行動をする子

どもの前で立ちすくんでいる大人の悲鳴に変わっていく。例えば、『子どもがなぜ親を殺すのか』『うちの子がなぜ』『親が知らなかった子の愛しかた』⁵⁾といった書名は、自分たちがイメージする「子ども像」とまったく違う現実の子どもの姿を前にして戸惑っている大人の姿を端的に示してくれる。

(2) 子どものとらえなおし

80年代に入ると、子どものとらえなおしについて新たな視点が提起された。例えば本田和子は、『異文化としての子ども』の中で、「子どもがわからなくなった」という表現において私たちが意識しなければならないのは、子どもはこのようなものなのだとして「わかっていた」ことの虚妄性に気づくことである、という指摘をしている。換言すれば、大人が抱いている固定化された「子ども像」とらわれているかぎり子どもの本当の姿はみえてこない、旧来の子ども観からの脱却が求められている、というわけである⁶⁾。

本田は、大人になっていく道筋において子どもをとらえる従来の子ども観から脱却して、大人とは「対立する他者として」、大人と子どもを「異文化」に住む者として相対化してとらえなおす必要を強調して、次のように述べている。「現在、私どもに自明と思われている『子ども』なるものが、たかだか18世紀以降の歴史的な観念であるとは、最近しばしば話題とされているところである。アリエスの大著『<子ども>の誕生』の訳出が、恐らくはそのきっかけの一つを提供したのだろう。」「いま、子どもに対するそのような『まなざし』に向けて、鋭いメスが突きつけられている。よくわかっていたはずの子どもたちがにわか姿を消していき、合理的な『子ども観』は急速なかげりを持ち始めた。なにしろ、ごく普通の子どもたちが、ごく当たり前前に、血塗られた劇の役を、次々と演じて見せてくれるのだから……。」「子どもへのまなざしが規範から逃れ、自由を取り戻す、そのとき、私どもの前に彼らの『他者性』が鮮やかに浮かび上がる。」「私どもは、『対立する

他者』としての子どもを捉え直す必要に迫られる。』⁷⁾

子どもと大人を異質なものとしてひとまず切り離し、それぞれを相対化してとらえようとするこの視点は、文化人類学の手法と共通するものであり、子どもを通して大人をとらえなおすという視点を内に含んでいる。

おそらくこうした旧来の子どものとらえ方の衰退という状況を背景にして、近年「子どもが嫌いだ」「子どもが好きになれない」「この子さえいなくなったら、私はもっといろいろなことができるはずなのにとすると、とんでもないことを思ってしまう」といった、従来の「子ども観」からは決して出てこないような悩みを率直に打ち明ける女性（母親）が急激に増大してきている。これまで、「子どもはかわいいもの」「子どもは弱いものだから守ってやらなければ」といった具合に固定的にとらえられていた子ども像が急激に崩れ、そうした子どものとらえ方に縛られていた女性たちが、一度子どもを相対化してとらえようとしはじめていることの表れであるようにも思われる。

こうした状況の下で今日は、さまざまに子どものとらえなおしが試みられている。ここでその全体像を俯瞰する余裕はないが、以下において近年の子ども研究の中に散見される幾つかの問題について指摘しておきたい。

〔注〕

- 1) 「70年代後半の今日における子どもの人間的諸能力と人格の発達をめぐる状態を全体としてみるならば、『児童の危機』（厚生省児童局『児童白書』1963年—引用者注）は少しでも軽減するどころか、ますます深刻化してきていることはもはや誰の目にも明らかであろう。……しかし、否、それだからこそ、われわれはこのような状況を眼前にして、事態をただ憂慮するのみで手をこまねいているわけにはいかない。」「今日、日本の民主的教育と教育学がみずからの課題としてあらためてとりくみを深めている子ども把握、子どものとらえ直しという問題関心と実践的、理論的努力は、このような課題に立ち向かうさまざまな側面からの努力と結びついて、今後なお、いっそう深化発展させられるべき重要な課題である。」茂木俊彦「現代日本の子どもの発達をめぐる問題」前掲『講座・日本の教育、第3巻、能力と発達』所収、pp. 41-42。

- 2) 同上, p. 44.
- 3) 石田和男「生活綴方精神で生活・学習意欲を高めるために」『教育』1976年5月号, 国土社, p. 98.
- 4) 「今日の世界の重みを, 子どもたちは背負いながら, 親にも教師にもつかめない子どもになってきはじめている」石田, 同上, p. 98.
「教師として毎日数多くの生徒と接していて, 目の前の中学生をどう理解してよいのかわからなくなったり, どうしたらよいのか途方に暮れる——この思いは, 今多くの教師に共通のものでしょう。」佐山喜作・君和田和一『中学生とともに』新日本出版社, 1981年, p. 8.
- 5) 菊池良輔『子どもがなぜ親を殺すのか』民衆社, 1989年, 佐瀬稔『うちの子がなぜ』草思社, 1990年, 佐木隆三『親が知らなかった子の愛し方』青春出版社, 1991年.
- 6) 本田和子『異文化としての子ども』紀伊国屋書店, 1982年, p. 18.
- 7) 同上, pp. 15-20.

III. 子ども研究の新たな展開

——現代子ども研究の課題——

(1) 子どものとらえなおしをどう進めるか

子どものとらえなおしを進めようとする場合, 何よりもまず要求されることは, 従来子どもを大人の従属物としてしかとらえることができなかった大人の態度, 換言すれば大人自身のあり方についての厳しい点検であろう。

斎藤次郎は『子どもたちの現在』の中で, 「ぼくたちと区別されるべき子どもは, 本当に客観的に存在しているのだろうか。ぼくは, 現代の子ども像は, 子どもを自明の客観的対象とする一般的前提からではなく, むしろほかならぬ前提への懐疑からしか紡ぎ出し得ないように思う」「子どもの中にぼくたち大人を含めた人間の本質を見いだそうとする努力なしには, そして, 成熟を遂げたはずの大人の価値観や発想を相対化し, 自己検証する覚悟なしには, この時代の子どもの像はついに明らかになし得ないだろう」と述べて, 大人自身のあり方への点検抜きに, 大人とは区別された子ども像を一面的に

あれこれ検討することに対して鋭い批判をおこなった¹⁾。

ここに典型的に示されているように、近年の子ども研究の特徴の一つは、子どもに光を当てることによって、逆に既成の秩序の中に生きる大人（社会）のあり方を照射する視野を手に入れようとする問題意識に裏打ちされているものが多いということである。先にふれた本田和子の研究はこうした問題意識で貫かれている²⁾。

また、現代の心理学研究においてこの観点を最も明瞭に示しているのは、ルネ・ザゾであろう。彼は、共同研究のまとめとして刊行された『学童の成長と発達』の総序説において、次のように述べている。「子どもとおとなはお互いに他方との関係においてしか考えることができない。」「子どもはおとなを説明する、しかしまたおとなも子どもを説明する、あたかも目標が道程を説明するように。」³⁾

「管理」教育が異常に浸透している今日の日本の学校教育の実体をみるにつけ、こうした観点からの子どものとらえなおしは重要である。

(2) 「新しい中世の到来」

今日における「管理」教育における子どもに対する教師たちの強圧的な態度をみると、現代の大人たちが現代の子どもたちに対応するだけの力と自信とを持ち合わせていないことにあせりすら感じているのではないかとすら思わせられる。確かに今日の大人たちの多くは、現代の子どもをつかみきれないまま自分自身を見失い、大人であることの自信を失っているようにみえる。そしてその背後にあるのは、大人と子どもを区別する明確な指標を見だし得ないでいる状況である。

例えば、M. ウインはその著書『子ども時代を失った子どもたち』の中で、また N. ポストマンは『子どもはもういない』の中で、それぞれ、これまで大人がイメージしてきたいわゆる「子どもらしさ」とはまったく異なる今日の子どもの生活と姿を正面から取り上げている。ウインはかつての無邪気で

あどけなく、遊びに夢中になっていた子どもらしい子どもは今日ではいなくなってしまう、と言い、ポストマンも服装や言葉遣いに、大人と子どもとの違いが少なくなってきたこと、テレビや映画や小説に登場する子ども像が、共通に大人びているといった現象を指摘し、その原因をそれぞれ究明した上で、そうした事態における子どもに対する社会や大人の態度や姿勢について論じている⁴⁾。

確かに、テレビ等に登場する女優やモデルの年齢が16,7歳であったり、リトルリーグやスポーツ少年団で懸命になっている子どもの姿をみていると、大人との違いはほとんど感じられない。大人と同質の文化や生活様式の中に直接入り込み、大人の行動様式や思考様式を早くから身につけているように見える子どもの姿が目につくのは事実である。

このように子どもと大人との境界が曖昧になるにつれて、大人と子どもの間の差異をすべて取り払い、できるだけ早く子どもを大人の世界に取り込もう、大人と「平等」に取り扱おうとする今日の意味で子どもを「小型の大人」ととらえる考え方が登場してきている⁵⁾。ウインはこうした状況をやや皮肉を込めて次のように指摘している。「慎重に大人の世界と子どもの世界を区別していた数世紀が過ぎた今、両者を区別しないパターンにもどろうとしている気配が感じられる。新しい中世の到来といっているいい。」⁶⁾

特に注意しておきたいのはウインもポストマンもともに、こうした傾向が「子どもの権利」の擁護者を自認し、子どもの「自由と平等」を主張する人たちの中にしばしばみられることを指摘している点である。

こうした状況をふまえてウインは、「子どもと大人のギャップを小さくし、子どもをもっと大人と平等に扱うようにすれば、子どもは半奴隷的な状態から解放される」という考え方に対して、「ややもすればアメリカ人は、子どもを大人と平等に扱えば、差別撤廃や民主化を進められると思い、このために大人の知識はすべて、子どもに分け与えるべきだと考えがちです。しかしこれでは、生後二日目の赤ん坊に豪勢なステーキを食べさせるようなもので

す。……生後二日目の赤ん坊には歯が一本もなく、ステーキは食べられない。窒息死するのが落ちです」というアーニー・ハーマンの批判を紹介しつつ、子どもには子ども時代に「子どもである権利」「大人に頼る権利」があることを主張している⁷⁾。また、人類史の見地からも、「人間がさらに発展をとげ、文化が複雑化すれば、子ども時代もさらに延長されなければならない」し、その期間を短縮することはできない、したがって大人と子どもの「新しい境界線」を引きなおし、子どもたちに「子ども時代」を取り戻す必要があるということを提言している。ポストマンもまた、子どもを大人と区別しない「哲学」を批判し、大人と子ども間の境界線の引きなおしの必要性を主張している。

今日の子どもたちをみたとき、一面においては確かに「早熟」とも言えるような「大人化した」子どもの存在がある。しかし同時に、今日の子どもたちは、他方においては意外なほどに幼稚な側面もあわせもっている。幼児性を克服できないでいる子ども、いつまでも自己中心的で、自分自身の欲望や衝動をコントロールできない子ども、「わかる力」が未発達な子ども、といった姿はしばしば指摘されることである。おそらく現実の子どもは、「早熟性」と「幼稚性」を同時に備えているのではないだろうか。今日の社会は、こうしたアンビバレントな状態を一人の子どもの中に同時に生み出すような社会なのであろう。そのように考えると、改めて人間の一生における「子ども時代」の意味の大きさを感じさせられる。

L. A. ポロクも述べているように、「現実には、子どもは受け身の存在ではなく親に自分の要求を突きつけており、親はこれらの要求を受け入れたうえで行動をとらなければならない」。また、「子どもは依存し、親は子どもの保護及び社会性の発達に責任を持つという二つの拘束をいつの時代も受けている⁸⁾」。大多数の親は、このような拘束のもとで親の役割をはたし、子育てに関わってきた。このように考えれば、一見「子ども時代」を喪失し、「大人との境界線」を消し去ったかにみえる今日の子どもの状態も、それが今日

の形態における子どもの大人に対する依存の仕方であり、要求の表現なのであろう。「子ども」あるいは「子ども時代」それ自体が喪失したのではなく、子どもからのそうした突き上げに対して大人が、社会がどのように対応したらよいのか、が見失われているのである。

残念ながらウインもポストマンも「新しい子どもらしさ」のとらえ方を示すことには手をつけていない。古い時代の、今日の大人の意識の中に固定された「子どもらしさ」ではなく、これからの時代の「新しい子どもらしさ」を追求する必要があるとそうである。

(3) 「発達」概念の否定

すでにふれたように、今日における子どものとらえなおしは、単に大人と区別された子どもの独自性という視点にとどまらず、さらに既成の秩序の体現者としての大人のあり方についての批判者として子どもを位置づけようとする思想を生み出している。そしてそのことと関連して、子どもから大人へという連続的な関連性において子どもをとらえることへの疑問がさまざまに提示されている。すなわち、大人がすでに作り上げている諸価値・文化の継承者あるいはそれに同化・適応していく存在として子どもをとらえる子ども観を否定しようとする観点である。例えば本田和子は、従来用いられている「発達」という概念が、現行「秩序への適応」とほぼ同義であり、そうした「秩序への適応を至上とする『発達の子どもの観』は自ら問い直されざるを得まい」として、「『発達』というフィルターを通して」子どもをとらえることをやめることを強く要求している⁹⁾。

「発達」という概念を否定することは、子どもが大人になっていくという視点を拒否することと結びついている。しかしながら、そのような子どものとらえ方からは、現実には子どもが大人になっていくためにどうしても乗り越えていかなければならない発達課題を模索するという方向性は出てこない。今日の状況のもとで私たちが子どもたちの発達段階に応じた当面する発達課

題、今乗り越えなければならぬ壁は何かを明らかにし、その課題（壁）を乗り越えていくための手だてをどう見つけたですか（教育課題の明確化）という努力を放棄したとき、子どもたちは一体どうなるであろうか。

今日、多くの子どもたちが「非行」「登校拒否」その他さまざまな問題行動に走っている背景には、彼ら一人ひとりが学習の目的や生きるめあてを見いだせないことがある。あるいはまた、差別と選別の教育機構の現実直面して、自分の将来に絶望し、生活への意欲を失っている子どももいるであろう。将来がみえすぎた「絶望」と未来がみえないことからくる「不安」。ここにも早熟と未熟の混在が認められる。いずれにしても、子どもは大人からみた「ユートピア」の状態にいるわけでは決してない。大人は、苦悩する子どもの周辺でいたずらに手をこまねき、子ども自身が独力で解決の糸口を見いだすのを待っているわけにはいかないのである。今私たちに求められているのはそのような冷たい子ども観ではない。

（4）発達研究の到達段階に学ぶ

今日の発達研究の到達段階は、子どもの発達過程を、既成の秩序を前提に、その中に安住する大人をモデルとしたゴールに単純に向かっていく道筋としてはとらえていない。それは、子どもの中に潜む発達の可能性に注目し、大人の予測を超え、大人自身を乗り越えていく発達可能態として子どもをとらえるという視点を提起している。

この点について堀尾輝久は次のように述べている。

「私たちは、子どもは未熟だといいます。確かにそのとおりですが、しかしその未熟さとは何なのか。それは完成したモデルに比べて、いわば未発達を意味するのか、それともそれを発達の可能態としてとらえ直すのかによって、子どもをとらえ方には大きな違いがあります。そして、発達の可能態としてとらえるということは、……子どもというものが現在の大人たちの予測する以上の発達の可能性をもっている、そして現在の大人を乗り

越える可能性をもっているという観点を含んでいます。

この考え方はまた、人間の諸能力を固定して考える見方を否定するものです。』¹⁰⁾

ここに示されているように、今日の発達研究は、子どもを完成されたモデルとしての大人との関係でいまだそれに到達していない「未熟な」存在としてとらえるという視点を克服し、現在の大人とは違った新しい大人になっていくものとして独自の価値を持つ存在としてとらえている。言うまでもなく、この子どもが大人になっていく過程をおしすすめる主体はもちろん子ども自身である。それゆえ子どもにとらえなおしという課題も、一方的に大人の側から子どもをどうみるか、といった視点だけではなく、大人と子どもの相互関係（コミュニケーション・交流）をどうつくるか、という視点が保持されなければならない。

ところが、現代の大人たちは余裕を持って子どもの要求を受けとめ、また子どもの発達にとって本当に必要となる発達課題を明確に示すだけの力量と自信とを持ち合わせていない。その結果、子どもたちとのコミュニケーションのきっかけを自ら閉ざしてしまっている。しかしながら、ザゾも述べているように、大人の本質は「完全」「完成」「成熟」といった状態とはかけはなれているのであって、むしろ「成熟とは、たえず疑問に付され続ける。……人間は決して終点につかない。完成するとは到達することではなく継続することである」。それだからこそ、とりわけ現代の大人は、「進歩とはたえず自分の価値を創り出し、たえず定義し直される自分の目的を創り出す」ということに理解を及ぼす必要がある¹¹⁾。

しかしながら、たとえ大人の実態がそのような状態であったとしても、子どもの発達過程は、子どもによってとらえられる大人のイメージに強く影響される。「心理的な、あるいは心理生理的な成長の軌道は、……目標の意識、不明瞭でも明瞭でも、正確でもゆがんでいても、この意識（によって理解することができる）。心にえがくいろいろのイメージによって、施される

あらゆる教育によって、子どもは自分自身の外なる、内なる目標をめざす。（子どもにとっては）目標はある絶対的なもの、完成したものにはちがいない¹²⁾。

大人が子どもの目標として常に子どもの目に映っているとすれば、大人自身が自らの状態に自信を持ってない今日において、子どもたちが自らの内部に既成の大人を乗り越えた自らの目標概念としての大人像を形成し、それに向かって前進していく過程を私たちはどのようにしたら援助することができるのだろうか。

スニデルスは『わが子を愛するのはたやすいことではない』の中で、「幼年期の各瞬間はその前の瞬間の否定であり、過去はしばしば強烈に否定されつつも、その過去は存続し、維持される。……過去は再びめぐり来て、秀でた水準で再び生まれる。そうした発展は平穩に成し遂げられるのではなく、果敢にも危機に直面することによって成し遂げられる¹³⁾」と述べている。

大人が、子どもの願いや喜びをより優れた水準で再生産しようとする努力を続けること、自分の人生をそのようなものとして追求し続けること、そうした姿こそが子どもに対して、大人になることへの希望と展望を示すことになるであろう。それこそが、子どもと大人との関係を対立的にではなく、また、相互に無関係な並列的にでもなく、相互関係的にとらえる、ということの内実となるであろう。

〔注〕

- 1) 斎藤次郎『子どもたちの現在』風媒社、1975年。
- 2) 本田、前掲書、pp. 19-22、参照。
- 3) ルネ・ザノ『学童の成長と発達』久保田正人・塚野州一訳、明治図書、1974年、p. 10。
- 4) M. ウィン『子ども時代を失った子どもたち』平賀悦子訳、サイマル出版会、1984年；Marie Winn: *Children without Childhood*, 1983, N. ポストマン『子どもはもういない——教育と文化への警告——』小柴一訳、新樹社、1985年；Neil Postman: *The Disappearance of Childhood*, 1982, 等がある。
- 5) ポストマン、同上、p. 200。

6) ウイン, 前掲書, p. 271.

7) 同上, pp. 255-268.

8) L. A. ボロク『忘れられた子どもたち』中地克子訳, 勁草書房, 1988年; L. A. Pollock: *Forgotten Children*, 1983, pp. 374-375.

9) 本田, 前掲書, pp. 16-20.

その他「発達」概念を批判, 否定しようとするものとしては山下恒男『反発達論』現代書館, 1977年, 山下栄一編『現代教育と発達幻想』明石書店, 1988年, などがある。また, こうした「反発達論」的見解に対する批判としては, 堀尾輝久『子どもを見直す——子ども観の歴史と現在——』岩波書店, 1984年, 田中孝彦『子どもらしさのこれまでとこれから』新日本出版社, 1990年, などがある。

10) 堀尾, 前掲書, pp. 105-106.

11) ルネ・ザゾ, 前掲書, pp. 11-15.

12) 同上, p. 10.

13) スニデルス, 前掲書, pp. 345-346.